

甲塚古墳発掘調査報告書Ⅳ

2022年3月

奈良大学文学部文化財学科

例 言

1. 本書は奈良県生駒郡斑鳩町龍田北1丁目に所在する甲塚古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は斑鳩町教育委員会と奈良大学文学部文化財学科が共同で2021年2月16日から3月11日までの計16日間に実施した。調査は斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課文化財係長荒木浩司、奈良大学文学部教授豊島直博が担当した。出土資料の整理分析および本書の執筆は2021年4月～2022年3月にかけて奈良大学文学部文化財学科が行った。
3. 現地調査、整理作業の参加者は第2章に記す。写真撮影は各調査区の担当者が担当した。製図の分担は挿図目次に示した。
4. 本書におけるレベル高はすべて海拔を表し、北方位は座標北を示す。
5. 発掘調査および報告書作成において下記の諸氏、諸機関のご指導とご援助を賜った。
上野あさひ、大西幹男、辛川あかり、河原秋桜、鈴木郁哉、田中秀弥、寺前直人、中井 歩、中川恋歌、橋本有正、松井成之、村瀬 陸、財務省近畿財務局奈良財務事務所、奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保護課。
6. 本書の執筆は豊島直博、奥井大生、金田将徳、河田哲也、郷田美宇、坂本湜明、佐藤直人、高井秀樹、松島隆介、的場紗希、谷野誠也が分担して行った。執筆者名は目次および執筆箇所の末尾に記した。編集は斑鳩町教育委員会事務局生涯学習課参事平田政彦、荒木と協議のうえ、豊島の指導のもと、山本美喜が担当した。
7. 本書は令和2年度奈良大学特別研究「奈良県斑鳩地域における古墳の調査研究」の成果の一部である。
8. 今回の調査で出土した遺物と作成した記録類は、報告書の刊行後、斑鳩町教育委員会が保管する。

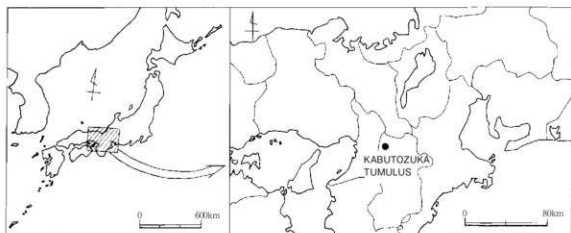
甲塚古墳発掘調査報告書Ⅳ

目 次

例 言

第1章 歴史的環境	松島隆介	1
第2章 調査の経緯と経過	奥井大生・坂本渥明	5
1 過去の調査		5
2 発掘調査の経過		7
第3章 発掘調査の成果		8
1 調査区の配置	的場紗希	8
2 第13調査区	郷田美宇・高井秀樹	9
3 第14調査区	金田将徳	10
4 第15調査区	河田哲也	11
5 出土遺物	佐藤直人・谷野誠也	13
第4章 総 括	豊島直博	14

図 版



甲塚古墳の位置

図 版 目 次

図版 1	1	第13調査区完掘状況（南東から）
	2	第13調査区完掘状況（南から）
図版 2	1	第13調査区完掘状況（南西から）
	2	第13調査区完掘状況（北西から）
図版 3	1	第14調査区完掘状況（西から）
	2	第14調査区石列 1・2 検出状況（南から）
図版 4	1	第15調査区完掘状況（南から）
	2	第15調査区完掘状況（北から）
図版 5	1	第15調査区出土土師器羽釜（外面）
	2	第15調査区出土土師器羽釜（内面）
	3	第13調査区出土土瓦（外面）
	4	第13調査区出土土瓦（内面）

挿 図 目 次

甲塚古墳の位置（高井製図）	iv
図 1 斑鳩町内の古墳時代遺跡分布図（松島製図）	3
図 2 調査の様子（奥井作成）	6
図 3 調査区の配置（豊島製図）	8
図 4 第13調査区平面図・断面図（郷田・高井製図）	9
図 5 第14調査区平面図・断面図（金田・松田製図）	11
図 6 第15調査区平面図・断面図（水川製図）	12
図 7 土器・瓦実測図（佐藤・谷野製図）	12
図 8 調査区全体図（豊島製図）	14
図 9 重図文鏡（丸山1987をもとに豊島作成）	15

第1章 歴史的環境

斑鳩の位置 奈良県生駒郡斑鳩町は、奈良盆地北西部の矢田丘陵南端に位置する。飛鳥から難波へ至る経路上に当たり、古代には多くの古墳、斑鳩宮や法隆寺といった宮殿・寺院が多く建立された歴史上重要な地域である。本章では、甲塚古墳の発掘調査報告に先立ち、斑鳩町内の主要な古墳と古墳時代の遺跡について述べてい。

前期古墳 前期古墳には、胸塚古墳(17)が挙げられる。築造時期は前期末頃で、斑鳩町内最古の古墳と推定される。法隆寺の東方に位置し、2000～2002年度に行われた発掘調査では、現存長49m以上、後円部径約34mの葺石をもつ二段築成の前方後円墳であることが判明した(荒木2007, 2011)。

中期古墳 中期古墳には瓦塚古墳群(16)、斑鳩大塚古墳(13)、戸垣山古墳(12)、寺山古墳群(6)などがある。

瓦塚古墳群(16)は、斑鳩町と大和郡山市の境界付近に位置する、2基の前方後円墳と1基の円墳で構成される古墳群である。1号墳は全長約97mの前方後円墳、2号墳は全長約95mの前方後円墳で、3号墳は直径約30mの円墳である(関川編1976)。2012年には航空レーザー測量が実施され、赤色立体地図が作成された(平田2014)。

斑鳩大塚古墳(13)は、1954年に墳頂部での石雲塔建設工事に際し発掘調査が実施された。その結果、粘土槨が検出され、銅鏡、石剣、武器などの副葬品が出土し、葺石と円筒埴輪列の存在が確認された(北野1958)。その後、長らく調査は行われなかったが、2014～2017年度にかけて斑鳩町教育委員会・奈良大学文化財学科が発掘調査を行い、直径約43mで、東に幅約11.5m、長さ約3.4mの遺出し、幅約8.9m、深さ約0.8mの周濠を有する円墳であることが判明した。周濠からは埴輪や土器が多数出土している(豊島・南編2018ほか)。

戸垣山古墳(12)は1974年に最初の測量調査が行われた(中井1975)。その後2011年に古墳の西側で立会調査が行われ、中期中頃～後半の埴輪片が出土している(荒木2014)。2017年に奈良大学が測量調査を行った。調査から、南北19m以上、東西17m以上、高さ約3.5mの方墳である可能性がある(豊島・南2018)。

寺山古墳群(6)は、4基の古墳で構成される古墳群である。2014・2015年度に奈良大学文化財学科が測量調査を行った。調査の結果、1号墳は直径約23mの円墳、もしくは全長約30mの前方後円墳、2号墳は直径約20mの円墳で、古相の群集墳である可能性が高いことが判明した(河村・高左右・豊島2015)。3号墳、4号墳は2015年度に奈良大学文化財学科が測量調査を行った。調査の結果、3号墳は南北約19m、東西約13mの方墳で、4号墳は、長径約16m、短径14mの円墳と推定された。それぞれ墳丘がさほど高くないため、埋葬施設は木棺直葬の可能性が高い(間所・宮畑・豊島2016)。

本書で報告する甲塚古墳(1)は、藤ノ木古墳の西方に位置する直径30mの円墳と推測されて

いる。斑鳩町教育委員会・奈良大学文化財学科によって2016年度に測量調査（土屋・豊島2016）、2018年～2020年度に発掘調査が行われている。墳頂部では木棺直葬の埋葬施設を確認し、重圏文鏡1面が出土した（豊島・南編2019、鈴木編2020、松島編2021）。墳形や規模、年代は定かでないが、ここでは中期古墳に含めておく。

後期古墳 後期古墳には、藤ノ木古墳（3）、春日古墳（4）、仏塚古墳（9）、梵天山古墳群（8）、寺山北古墳群（10）などがある。

藤ノ木古墳（3）は、法隆寺から西約350m地点に位置する直径約50m、高さ約9mの円墳である。南東方向に開口する全長約14mの両袖式横穴式石室を有し、石室内からは須恵器と土師器の土器群、金銅製の馬具や武器、武具、二上山産白色凝灰岩を用いて造られた未盗掘の朱塗りの削り抜き式家形石棺が確認された。石棺内からは金銅製の冠、銅鏡、刀剣類、玉類などの副葬品と人骨が出土した。人骨は若年・壮年男性の2体分存在することが確認された（勝部ほか編1990、前園ほか編1995、平田2008）。

春日古墳（4）は、藤ノ木古墳の北東約150m地点に位置することから、藤ノ木古墳と同様に有力な後期古墳と目される古墳である。3次元レーザー測量調査、過去に行われた周辺の発掘及び立会調査によって、直径30m以上の円墳と推定される。また、墳丘南側斜面には石室の一部とみられる石材の露出が確認されている（平田2013）。

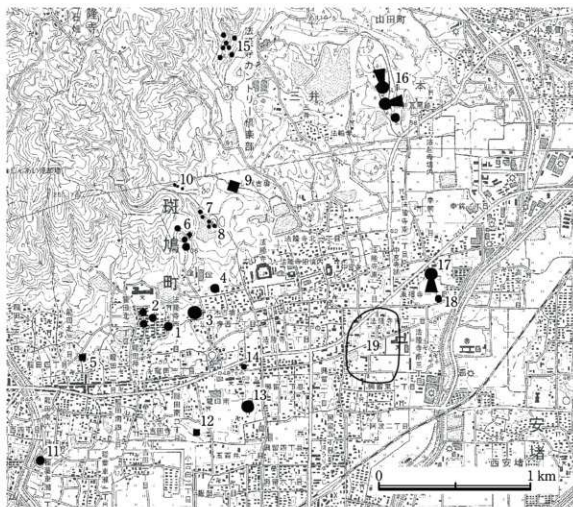
仏塚古墳（9）は、法隆寺の北方に位置する一辺約23mの周濠を巡らせた方墳である。両袖式横穴式石室を有し、石室内には環状に排水溝が巡ることが確認されている。石室内からは陶棺片、金環、刀子、須恵器、土師器のほか仏具や仏像も出土しており、中世には石室を堂として利用したと考えられる（河上・関川1977）。

梵天山古墳群（8）は、3基の古墳で構成される古墳群である。2018年に奈良大学文化財学科が測量調査を行った。調査から、1号墳は直径15m、2号墳は直径12m、3号墳は直径15mの円墳と推定される。いずれも墳丘が低く、1号墳、3号墳の盗掘坑付近で石室石材が認められないことから、堅穴系の埋葬施設をもつ初期群集墳であると考えられる（豊島2019）。

寺山北古墳群（10）は3基の古墳で構成される古墳群である。2021年に奈良大学文化財学科が測量調査を行った。1号墳は直径約17mの円墳と推定される。1号墳の北西には2号墳と3号墳がある。2号墳は直径約7.5mの円墳、3号墳は直径約12mの円墳とそれぞれ推定される。現状では埋葬形態は明らかではないが、石材等が認められていないことから、木棺直葬などの堅穴系の埋葬施設をもつと考えられる。古墳の状況と周辺の古墳群との関係から梵天山古墳群と同じく初期群集墳であると考えられる（豊島・松島・小林・高井2022）。

終末期古墳 終末期古墳には竜田御坊山古墳群（2）、神代古墳（5）などがある。

竜田御坊山古墳群（2）は、藤ノ木古墳から西約250mの地点に存在し3基の終末期古墳からなる。1・2号墳の墳丘形態や規模は不明であるが、1号墳の埋葬施設は高さ1m、長さ2m、幅1.7m程度の堅穴式石室状のものと推定されており、3体の遺体が埋葬されていたことが確認されている。金銅製銀付六花形座金具、鉄釘が採集されている。2号墳は横穴式石室を有する古



国土地理院発行2万5千分の1地形図「信貴山」使用

- 1 甲塚古墳 2 竜田御坊山古墳群 3 藤ノ木古墳 4 春日古墳 5 神代古墳
 6 寺山古墳群 7 慶華池古墳群 8 梵天山古墳群 9 仏塚古墳 10 寺山北古墳群
 11 稲葉車瀬古墳群 12 戸垣山古墳 13 斑鳩大塚古墳 14 亀塚古墳 15 三井古墳群
 16 瓦塚古墳群 17 駒塚古墳 18 調子丸古墳 19 酒ノ免遺跡

図1 斑鳩町内の古墳時代遺跡分布図

墳であるが、石室規模は不明である。2号墳からは家形石棺蓋石の破片が出土している。

もっとも全容が判明している3号墳は、全長8m以上、高さ2.5mの円墳と推定される。埋葬施設は横口式石槨で、内部には黒漆塗りの陶棺が安置されていた。棺内からは若年男性の人骨1体と琥珀製杖、三彩有蓋円面甕、管状ガラス製品など類を見ない副葬品が出土していることから、被葬者は上宮王家の一員と想定される（泉森編1977）。

神代古墳（5）は、瀧谷神社の境内に3個の石材がゴの字形に並び、横口式石槨をもつ古墳と推定され、東西約20mの古墳と報告されている（前園編1990）。また、石槨は7世紀中頃のものであると報告されている（山内1998）。2019年に奈良大学文化財学科が測量調査を行い、一辺約20m以上の方墳で、石槨内法の規模は2.6m×1.6mであると判明した（豊島・松島2020）。

集落遺跡 集落遺跡には、酒ノ免遺跡（19）が挙げられる。酒ノ免遺跡は20以上に渡る発掘

調査が行われている。調査では50棟以上の掘立柱建物が検出された。建物は掘立柱建物のみで構成されており、5世紀末から7世紀初頭にかけて営まれていたことが判明した。奈良県下有数の集落遺跡である（藤井1986）。

以上が、斑鳩町内の主要な古墳と古墳時代の遺跡である。

（松島隆介）

第2章 調査の経緯と経過

1 過去の調査

古墳の現状 甲塚古墳は国（財務省近畿財務局奈良財務事務所）の所有地で、地目は畑であるが、字名が「甲塚」で丘状の高まりがあるため、「甲塚古墳」と呼称され、遺跡として保護されている。2015年10月から斑鳩町が管理団体となり、古墳の維持管理を行っている。古墳は「錦ヶ丘」と呼ばれる在宅地となっている丘陵東端に立地し、墳丘は現況で見る限り、西側は宅地、北側は農道によって削平され、旧状を保っているのは東側から南側にかけての部分に限られると考えられる。

測量調査 甲塚古墳はこれまで一辺10mあまりの古墳と推定されてきた（前編編1990）。藤ノ木古墳と竜田御坊山古墳群の中間に位置することから、藤ノ木古墳に後続する首長墓の可能性はある。しかし、墳丘は削平が進み、さらに崩落する恐れもある。今後、古墳の保存・活用を行ううえで正確な情報を把握する必要があった。そこで、2016年8月に奈良大学文化財学科が測量を行った（土屋・豊島2016）。調査の結果、墳丘東側の斜面が標高59.8m付近まで円弧を描くことが判明した。それを墳端ととらえると、最大で直径約30mの円墳と推測できる。また、奈良文化財研究所の金田明大氏、山口欧志氏のご協力を得て、2017年12月18日に地中レーダー探査を実施した。しかし、埋葬施設に関する具体的な情報は得られなかった。

第1次調査 以上の成果から甲塚古墳は従来の想定より規模が大きくなる可能性が高まった。また、埋葬施設が存在する可能性も考えられた。そこで古墳の実態を解明するため、2018年2月19日から同3月29日までの日程で第1次調査を行った。3ヶ所の調査区を設定した結果、第1調査区では盛土と石列を確認し、第2調査区では墳端と考えられる溝を確認した。しかし、埋葬施設の確認はできず、甲塚古墳が古墳であるという確証は得られなかった（豊島・南編2019）。

第2次調査 埋葬施設の確認と石列の性格、墳形と規模を確認するため、2019年2月18日から3月28日まで第2次調査を行った。6ヶ所の調査区を設定した結果、第4調査区で埋葬施設を確認した。中心付近に赤色顔料の散布が認められ、重圏文鏡が1面出土した。第6調査区では墳端の可能性が考えられる地山の平坦面を確認し、第7調査区では第1調査区で検出した石列とは一連ではないと考えられる石列を確認した。この調査で甲塚古墳が古墳であることは確定したが、墳形や規模、年代を確認するには至らなかった（鈴木編2020）。

第3次調査 古墳の正確な形態と規模を把握するために2020年2月17日から同3月13日まで4ヶ所の調査区を設定し、第3次調査を行った。その結果、第9調査区では南西側で墳丘盛土を確認できたが、第1調査区拡張区の石列のつづきと墳端は確定できず、第11調査区で石材採取が確認された。これは第1調査区で確認された石列の延長線上に位置しており、その東側の平坦面には石列が確認され、その付近が墳端である可能性がある。この調査でも甲塚古墳の墳形、規模、



1. 調査区の設定 (第13調査区)



2. 掘削の様子 (第13調査区)



3. 遺構の検討 (第14調査区)



4. 掘削の様子 (第15調査区)



5. 断面図の作成 (第13調査区)



6. 写真撮影 (第13調査区)



7. 埋め戻し (第14調査区)



8. 参加者集合写真

図2 調査の様子

築造年代について正確な情報は得られなかった（松島編2021）。

2 発掘調査の経過

前年度の成果をふまえ、墳形や規模を確認するため、2021年に第4次調査を行った。調査区は墳形を確認するための第13調査区・第14調査区、さらに埋葬施設の端部を確認するための第15調査区を設定した。

今回の調査は斑鳩町教育委員会と奈良大学文学部文化財学科の共同で行い、調査期間は2021年2月16日から3月11日までの雨天や休日を除いた計16日間である。おもな調査経過は以下の通りである。

- 2月16日 機材を搬入。調査区を設定し、掘り下げ開始。
- 2月22日 第14調査区で上段の石列や下段の石列を確認。
- 2月25日 第13調査区部で墳丘の裾付近を完掘。
- 3月1日 第13・14調査区写真撮影完了。新たに第15調査区を墳頂部に設置し、掘削開始。
- 3月4日 第15調査区を完掘し、写真撮影。
- 3月9日 第14・15調査区の埋め戻しを開始。
- 3月10日 第13調査区の埋め戻しを開始。
- 3月11日 すべての埋め戻し作業を終了。機材を撤収し、調査終了。

遺物整理と報告書作成 発掘調査終了後、2021年7月から翌年3月まで、奈良大学文学部文化財学科で遺物整理及び報告書作成を行った。

発掘調査参加者 今回の調査の参加者は以下のとおりである（括弧内の学生は2021年3月当時）。

豊島直博（奈良大学文学部教授）、荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、中江隆英、松島隆介、山本美喜（以上、大学院修士1回生）、小林友佳（以上、文学部4回生）、金田将徳、河田哲也、谷野誠也、的場紗希、佐藤直人（以上、文学部3回生）、高井秀樹、奥井大生、郷田美宇、坂本潔明（以上、文学部2回生）、天野峻平、柴田龍弥、水川慶紀、池上 京、近田奈々海、谷口聡美、天野青空、松田青空（以上、文学部1回生）。

（奥井大生・坂本潔明）

第3章 発掘調査の成果

1 調査区の配置 (図3)

今年度の調査では、墳丘の南東部と東部、埋葬施設の北端部の様相を確認し、古墳の規模と構造の解明を目指した。第3調査区と一部重複する形で、第7調査区と第12調査区の上に第13調査区、第1調査区と第11調査区の上に第14調査区、第4調査区の東に第15調査区を設定した。

(的場紗希)

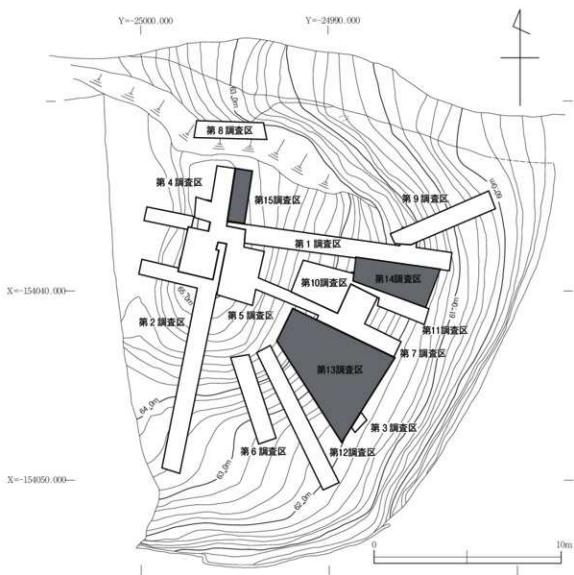


図3 調査区の配置 1 : 200

2 第13調査区(図4、図版1・2)

位置と目的 第13調査区は墳頭の確認のため2018年度の第7調査区と、2020年度の第12調査区の間に設定した。2018年度の第3調査区を含む。墳頂側の幅2m、墳端側の幅5.2m、長さ6m、面積26.6㎡の台形の調査区である。

基本層序 墳丘盛土の内側と外側では基本層序が異なる。盛土の内側では、中世から近代の堆積土と思われる灰黄褐色砂質土(厚さ約5~40cm)、墳丘盛土である灰黄褐色砂質土(厚さ約10~20cm)、灰白色砂質土(厚さ約2~15cm)となる。盛土上面の標高は最も高いところで64.1mである。

盛土の外側では、表土である黒褐色砂質土(厚さ約2~10cm)、中世から近代の堆積土である明黄褐色砂質土(厚さ約10~35cm)ないし暗黄褐色砂質土(厚さ約5~30cm)がみられ、地山

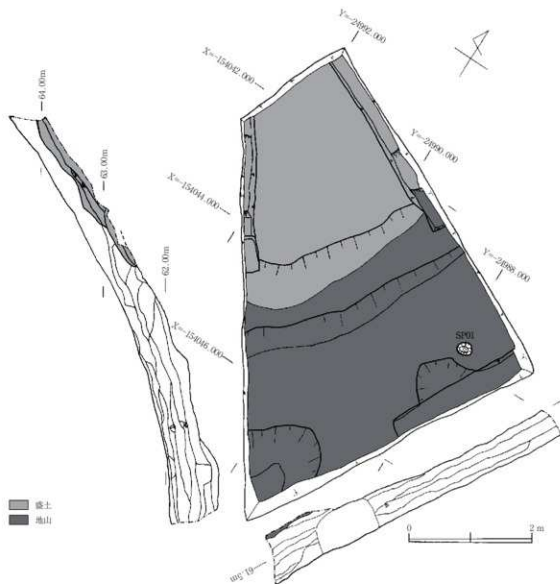


図4 第13調査区平面図・断面図 1:60

ブロックを含む灰オリーブ砂質土（厚さ約5～25cm）、明黄褐色砂質土（厚さ約5～10cm）を経て地山に至る。

検出遺構 墳丘盛土、柱穴SP01を確認した。墳丘盛土は、調査区北端から南に2.3mにわたり検出した。盛土は灰黄褐色砂質土、灰白色砂質土が調査区北側からなだらかに盛られている。

調査区の南東側では、南東隅から約3m付近に若干の段差がある。その外側に幅約2mの平坦面があり、段差付近が墳端と考えられる。墳端はゆるやかな曲線を描く。また、これまでの調査では明瞭なコーナーは確認できなかったため、甲塚古墳は円墳である可能性が強まった。第2次調査で出土した銅鏡の付近を古墳の中心と考えれば、甲塚古墳は直径約20mの円墳の可能性がある。

墳丘では、墳端より墳頂側にも若干の段差が生じているが、後世の削平によるものと考えられる。なお、北東側の第7調査区で確認した石列2は第13調査区では検出されなかった。

柱穴SP01は北東壁から南西に約80cmの位置で、単独で検出した。直径約20cm、深さ約30cmである。古墳に伴うものではなく、中世以降の遺構と考えられる。

遺物は表土から土器片1点、瓦片1点が出土した。また、中世から近代の堆積土から瓦片2点が出土した。なお、墳丘盛土から遺物は出土しなかった。

（郷田美宇・高井秀樹）

3 第14調査区（図5、図版3）

位置と目的 第14調査区は、墳形と墳丘の範囲、2019年度の第7調査区で検出した石列1・2の続きを確認するために設定した。墳頂側の幅1m、墳端側の幅2m、東西の長さ4.2mの台形の調査区である。第11調査区と第1調査区と重なるため一部を再発掘し、最終的な調査面積は6.3㎡となった。

基本層序 調査区南壁は第10・11調査区の北壁に該当する。また北壁は第1調査区の南壁と重なるため、墳端付近のみを記録した。今回提示した北壁断面図は第1調査区南壁を反転して合成したものである。層序は暗褐色砂質土の表土および中世の遺物包含層（厚さ約20～40cm）、黄褐色砂質土および灰白色粘質土の墳丘盛土（厚さ約40cm）を経て、明黄褐色砂質土の地山に至る。地山の標高は約61.9mである。

検出遺構 墳丘盛土と石列2の続きがある。墳丘盛土は、調査区西端から東に約2m分を検出した。最も高い部分で標高約63.0mである。石列2は調査区西側で検出したが、石材の方向が乱れ、原位置を保っていないと考えられる。また、墳丘盛土よりも東側は木の根による攪乱を受けているが、標高61.7m付近で若干の平坦面をなしており、この付近が墳端の可能性が高い。第1調査区で確認した石列1も、攪乱により第14調査区まで続かなかった。

出土遺物は、遺物包含層からわずかに土器片が出土したのみである。

（金田将徳）

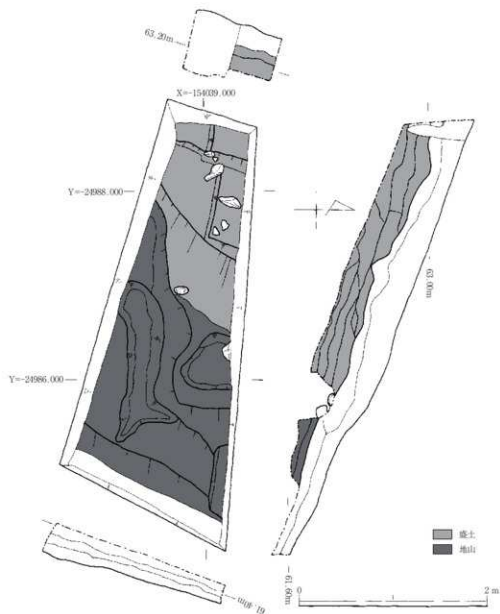


図5 第14調査区平面図・断面図 1:40

4 第15調査区(図6、図版4)

位置と目的 第15調査区は、埋葬施設の北東部を確認するため、第4調査区に接して東西0.9m、南北3.1mの規模で設定した。調査面積は約2.8㎡である。

基本層序 上から順に表土である暗褐色砂質土(厚さ20~30cm)、褐色粘質土、黄褐色粘質土の墳丘盛土へ至る。

検出遺構 調査区全体で墳丘盛土を確認した。盛土上面の標高は調査区南端では約65.7m、北端では65.6mで、北へわずかに低く傾斜している。調査区内では埋葬施設の続きは確認できず、すでに削平されていると考えられる。なお、表土より土師器の口縁部破片と円形の石製品が出土したが、古墳に伴うものではない。(河田哲也)

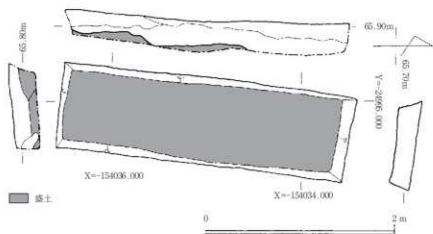


图6 第15调查区平面图·断面图 1:40

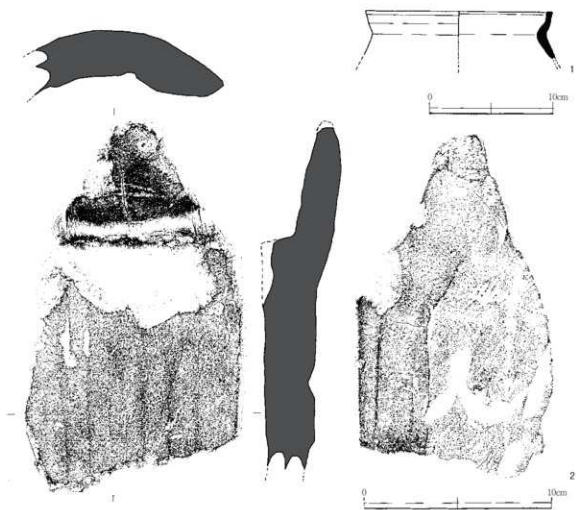


图7 土器·瓦类测图

5 出土遺物（図7、図版5）

今回の調査では調査区全体からコンテナ1箱分の遺物が出土した。

1は第15調査区の表土から出土した羽釜の口縁部である。調整は内面・外面ともに指ナデが施されており、口縁部は「くの字」状に屈折している。器壁の厚さはほぼ一定であるが、口頸部から下に行くにつれ若干厚みを増していく。胎土は2mm以下の黒雲母を含む。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。以上の特徴から、中世（12世紀）の羽釜と考えられる（奥井2007）。

2は第13調査区から出土した丸瓦である。胴部高約2.5cm、凹面の布目痕の目は細かく、吊り組痕は山の部分で一回転し、ループ状にしている。凹面縁の面取りは約3cmで、凸面の面取り後、縁辺を2mm程度の幅で削っている。以上の特徴から室町時代中期に位置づけられる（小林・佐川1989）。

（佐藤直人・谷野誠也）

第4章 総括

最後に、今回の調査成果を総括したい。

各調査区の成果 第13調査区では、墳丘の盛土と外側の平坦面を確認した。墳端はわずかに弧を描く。また、これまでの調査区では方墳の隅部は確認されていないことから、甲塚古墳は円墳の可能性が高まった。第4調査区で確認した埋葬施設を古墳の中心と仮定すると、甲塚古墳の直径は約20mと推定される。

第7調査区で確認した石列2は、第13調査区まで続かなかった。石列の上面から中世の瓦が出土しており、石列2も中世の遺構である可能性が高まった。

第14調査区では石列1の続きを確認できなかった。付近は後世の攪乱を受けており、石列1が

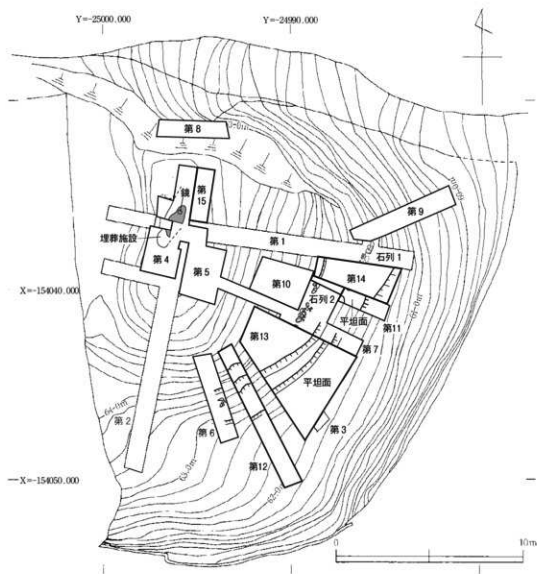


図8 調査区全体図 1:200

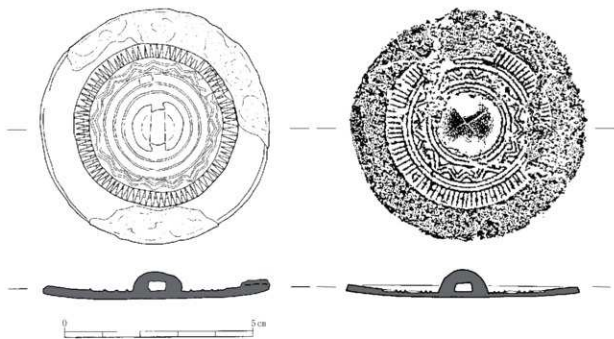


図9 重圏文鏡（左：甲塚古墳 右：向谷1号墳） 1：1

古墳に伴う確証は得られなかった。

第15調査区では墳丘盛土を確認したが、木棺痕跡の続きは確認できなかった。木棺の北東部はすでに削平されていると考えられる。

重圏文鏡の関連資料 第4調査区で出土した重圏文鏡は、①重圏文の外側に複波文をもつこと、②外区の鋸歯文が極めて細かいことが特徴であった。2次調査の報告段階では類例を知らなかったが、中井歩氏よりご教示を受け、福岡県春日市向谷1号墳で類例が出土していることを知った（丸山1987）。ただし、向谷1号墳例は複波文と鋸歯文の間にも重圏文をもつ点が異なる。

なお、向谷1号墳は一辺約15mの方墳で、2基の木棺を直葬する。重圏文鏡が出土した第1主体部からは素環頭大刀、鉄剣2点、鉄鎌、農工具などが出土しており、前期後葉頃の築造年代が想定される。甲塚古墳の築造年代を推定する参考になろう。

今回の調査では、甲塚古墳の墳形と規模について新たな情報を得ることができた。古墳の築造年代については、今後も出土遺物と関連資料の検討を踏まえて結論づけたい。

（豊島直博）

参考文献

- 荒木浩司 2007「駒塚古墳 (01-1次) 調査」荒木浩司編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成13 (2001) 年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2011「駒塚古墳 (02-1次) 調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14 (2002) 年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2014「戸垣山古墳西側における立会調査出土の埴輪片について」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 泉森 皎編 1977「竜田御坊山古墳群 付 平野塚穴山古墳」奈良県教育委員会
- 奥井智子 2007「畿内における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究』21 土製煮炊具の諸様相 日本中世土器研究会
- 勝部明生ほか編 1990「斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書」斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 河上邦彦・関川高功 1977「斑鳩・仏塚古墳」斑鳩町教育委員会
- 河村万里・高左右裕・豊島直博 2015「奈良県斑鳩町寺山古墳群測量調査報告」『文化財学報』第33集 奈良大学文学部文化財学科
- 北野耕平 1958「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物抄報』第十輯 奈良県教育委員会
- 小林謙一・佐川正敏 1989「平安時代～近世の軒丸瓦」『伊河留我 法隆寺昭和資財帳調査概報』10 小学館
- 関川高功編 1976「斑鳩町 瓦塚1号墳発掘調査概報」奈良県教育委員会
- 鈴木郁哉編 2020「甲塚古墳発掘調査報告書Ⅱ」奈良大学文学部文化財学科
- 土屋博史・豊島直博 2016「奈良県斑鳩町甲塚古墳・亀塚古墳測量調査報告」『文化財学報』第35集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・南 貴匡 2018「奈良県斑鳩町戸垣山古墳測量調査報告」『文化財学報』第36集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・南 貴匡編 2018「斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅳ」奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博 2019「奈良県斑鳩町梵天山古墳群測量調査報告」『文化財学報』第37集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・南 貴匡編 2019「甲塚古墳発掘調査報告書Ⅰ」奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・松島隆介 2020「奈良県斑鳩町神代古墳測量調査報告」『文化財学報』38 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・松島隆介・小林友佳・高井秀樹 2022「奈良県斑鳩町寺山北古墳群測量調査報告」『文化財学報』第40集 奈良大学文学部文化財学科
- 中井一夫 1975「斑鳩町戸垣山古墳の測量調査」『青陵』No.27 奈良県立橿原考古学研究所
- 平田政彦 2008「史跡藤ノ木古墳 保存整備事業報告書」斑鳩町教育委員会
- 平田政彦 2013「春日古墳墳丘測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第2号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 平田政彦 2014「瓦塚古墳群航空レーザー測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 藤井利章 1986「奈良県斑鳩町 酒ノ免遺跡の研究」斑鳩町教育委員会
- 前岡実知雄編 1990「斑鳩町の古墳」斑鳩町教育委員会
- 前岡実知雄ほか編 1995「斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書」斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 松島隆介編 2021「甲塚古墳発掘調査報告書Ⅲ」奈良大学文学部文化財学科
- 間所克仁・宮畑勇希・豊島直博 2016「奈良県斑鳩町寺山3・4号墳測量調査報告」『文化財学報』第34集 奈良大学文学部文化財学科
- 丸山康晴 1987「春日地区遺跡群Ⅴ」春日市教育委員会
- 山内紀嗣 1998「上宮王家の墓」網干善教先生古稀記念論文集刊行会編『網干善教先生古稀記念 考古学論集』上巻 網干善教先生古稀記念会

圖 版



1 第13調査区完掘状況（南東から）



2 第13調査区完掘状況（南から）

図版 2



1 第13調査区発掘状況（南西から）



2 第13調査区発掘状況（北西から）



1 第14調査区完掘状況 (西から)



2 第14調査区石列1・2
検出状況 (南から)

図版 4



1 第15調査区完掘状況 (南から)



2 第15調査区完掘状況 (北から)



1 第15调查区出土土器羽釜 (外面)



2 第15调查区出土土器羽釜 (内面)



3 第13调查区出土丸瓦 (外面)



4 第13调查区出土丸瓦 (内面)

報告書抄録

ふりがな	かぶとづかこふんはくつちょうさほうこくしょん				
書名	甲塚古墳発掘調査報告書Ⅳ				
副書名	奈良大学考古学研究調査報告書第27冊				
編著者名	豊島直博、山本美喜、奥井大生、金田将徳、河田哲也、郷田美宇、坂本渥明、 佐藤直人、高井秀樹、松島隆介、の場紗希、谷野誠也 (編集：山本美喜)				
発行機関	奈良大学文学部文化財学科				
所在地	〒631-8502 奈良市山陵町1500				
所収遺跡名	所在地		コード		
甲塚古墳	奈良県生駒郡斑鳩町龍田北1丁目1733		市町村	遺跡番号	
			293440	141	
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
34度6分12秒	135度72分74秒	20210216～20210311	35.7㎡	範囲確認調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲塚古墳	古墳	古墳時代	墳丘	土器 瓦	墳丘盛土、墳丘裾を検出。

甲塚古墳発掘調査報告書Ⅳ

2022年3月発行

編集 奈良大学文学部文化財学科

発行 奈良大学文学部文化財学科
〒631-8502 奈良市山陵町1500

印刷 有限会社 真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル

